

文献 32

井手口翔星, 宮本直, 島津大暢, 谷口剛志, 鷹峰澄子, 田口辰樹, 安藤文紀. 運動による関節位置覚の変化に対する鍼施術の影響について. 東洋療法学校協会学会誌. 2006; 29: 77-81. 医中誌 web ID 2006145151

1. 目的

スポーツ現場に近い筋疲労モデルを用い、運動疲労が及ぼす関節位置覚の変化を再現し、それに対する鍼刺激の影響を検討すること。

2. 研究デザイン

比較臨床試験 (CCT) 封筒法

3. セッティング

記載なし。

4. 参加者

両膝関節に外傷や手術の既往のない成人男性 25 名 25 膝

5. 介入

Arm1: 1Hz 鍼通電群 運動負荷 (トレッドミル運動) 前後に関節位置覚の測定を行い、その後 10 分間、血海、梁丘、鶴頂の 10cm、20cm 上 4ヶ所に 1Hz、10 分間の鍼通電を行った後再度関節位置覚を測定した。

Arm2: 30Hz 鍼通電群 同様のプロトコルにおいて、10 分間の鍼通電 (30Hz の間歌通電) を行った。

Arm3: 無処置 (安静) 群 同様のプロトコルにおいて、仰臥位安静を 10 分間行った。

6. 主なアウトカム評価項目

膝関節位置覚 ($20+5^\circ$ 、 $40+5^\circ$ 、 $60+5^\circ$) における再現角度誤差 (RAI)

7. 主な結果

1Hz 鍼通電群は、全ての角度において、運動後と比較して RAI の改善傾向がみられたが、有意差はなかった。30Hz 鍼通電群は他の 2 群よりも改善傾向が少なく、 $40+5^\circ$ においては運動後と変化しなかった。

8. 結論

運動後に RAI が増加する傾向があるが、1Hz の鍼通電により RAI の改善傾向がみられた。

9. 論文中の安全性評価

記載なし。

10. Abstractor のコメント

漸次傾斜角度を増加させたトレッドミル走による筋疲労モデルを用いた関節位置覚の再現誤差を検討した研究である。運動後、様々な要因により RAI が増加し 1Hz の鍼通電刺激で改善傾向がみられた点において、この刺激周波数が関節位置覚の変化に影響を及ぼす点は大変興味深い。しかし、運動前後および介入後の比較において、群間や群内での有意差はなく、改善傾向があるとはいい難く、また、傾向を示すための適切な p 値も示されていない。クロスオーバー法などを用い、比較する必要も感じられるため、今回の課題と成果を踏まえ今後の研究が期待される。

11. Abstractor and date

池宗佐知子 2016. 3. 25